

## 「奉仕の理念」

ロータリー理念研究委員会  
大内 啓  
(柏南RC)

2010年の規定審議会に釧路北RCから、「社会奉仕に関する1923年の声明の第1項を奉仕の哲学の定義として使用することをRI理事会に要請する」内容の決議案10-182が提出されました。

(決議23-34、第1項)とは  
ロータリーは、基本的には、一つの人生哲学であり、それは利己的な欲求と義務およびこれに伴う他人のために奉仕したいという感情とのあいだに常に存在する矛盾を和らげようとするものである。この哲学は奉仕—「超我の奉仕」の哲学であり、これは、「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」という実践的な倫理原則に基づくものである。

この決議案は444対66という圧倒的多数で採択され、世界の多くのロータリアンが(奉仕の理念)に共感していることを確認できたと思う反面、「反対に投じた代議員が66人もおられたということが世界における今日のロータリーの変化を反映している」と、当時ご尽力された黒田RI理事が述べられております。  
(ロータリーの友2010-9月号より)

歴代の日本のRI理事の方々のご努力も有り、6月のRI理事会全員会議の採決で第1項はロータリー章典への掲載が認められ声明文も修正されることなく『手続き要覧』への掲載が認められました。先人達の功績を受け継ぎ未来に繋げる文章を残せた意義深い採決となりました。

第10分区ロータリー情報研究会において基調講演された、北 清治(2013-15年度)RI理事は、奉仕の哲学についてのお話の中で、ロータリーの第一標語を(自他を共に利する奉仕)第二標語を(奉仕するほど利益が増える職業人の理想的な奉仕)とご説明されました。

人の生き方を考えてみると、人は共同体を離れて生きることは絶対にありえないことに気づきます。人は家庭に属し、学校に、企業に、地域社会に、国家に属しています。そして、その共同体の中に自分の居場所があると感じられることを望むのは、人間の基本的な欲求です。

どうすればその欲求が満たされ、共同体感覚をつかみ取れるのでしょうか？

1900年代初頭にアルフレッド・アドラーによって提唱された「個人心理学」によれば、共同体において「自分にできること」と「自分にできないこと」を見極め容認する「自己受容」と他者に信頼をよせ

ることで他者を仲間とみなすことが出来る「他者信頼」そして仲間である他者に対してなんらかの貢献(労働)をしようとする「他者貢献」によって共同体感覚は、得られるものとされています。他者貢献(奉仕)とは自己犠牲の精神を見せて誰かに尽くすことではなく、むしろ自分の価値を実感するためにこそなされるもだと云われています。

我がクラブにおける小さな実例を申し上げますと、長年に渡り例会日に誰よりも早く例会場に来て、これから始まる例会場の設営を毎週続けている高齢のAさんがいます。他の会員はそんな準備作業が毎週行われていることさえも気づかずにいるのに、はたから見ると、なぜAさんだけが働かねばならないのかという状況になっています。

しかし、Aさんは不満そうな顔をせず、ただ一人淡々と作業を進めていきます。

たまたま早く来た会員が、Aさんに気づきあわててお手伝いすると、とても嬉しそうに喜んでくれます。Aさんの心情を慮りますと、『他者が自分に何をしてくれたかではなく、ただ自分が他者になにをできるか』を考え実践していきたいのです、かりに他者からの感謝の言葉がなくとも、クラブの皆を『信頼する仲間』だと思えているから進んで行動し、自らの働きに「私はだれかの役に立っている」と実感し、ひいては自らの存在価値を受け入れ、このクラブに自分の居場所を確認して居るのでは無いでしょうか。仲間のために行う貢献は決して偽善ではありません、Aさんの働く姿を見ると誰しもがAさんを手伝うようになるからです。

ロータリーの目的にある「奉仕の理念」とは「他の人を思いやり、他の人の役に立つことをすること」を意味します、この理念を個々の職業に取り入れ自分の生き方と仕事が一致していた時代はもはや古臭いものになっているのでしょうか？

昨今の株主資本主義ともいえる経営の主体は、利益を人生の目的として仕事を捉えるばかりに、世界の多様性に目を向けると急速な経済発展に人のモラルが追い付かず、その結果グローバル化の弊害として社会全体の劣化を招く事にならないか心配です。今こそロータリーの真髄である奉仕の理念を学び合う時だと思えます。

第2790地区ロータリー理念研究委員会  
海寶勘一(千葉西)、平山勝已(千葉若潮)、  
大内 啓(柏南)、島 正彦(館山)、松田泰長(成田)